

# J・ヒックの宗教多元主義における 仏教理解についての一考察

南部 千代里

(和文要旨)

本研究は、ジョン・ヒック (John Hick, 1922–2012) の宗教多元主義 (Religious Pluralism) における問題を、日本仏教の視点から検討する。しかしながら、宗教多元主義はキリスト教文化圏から発せられた思想である。それゆえに、仏教文化圏に生きる私たち日本人においては、その構造的な内容そのものを把握することが肝要となる。したがって、最初に、宗教多元主義という概念が、キリスト教神学界に提示されるに至った状況を述べ、次に、宗教としてのキリスト教の本質が何であるかを明らかにする「三つの類型」についての議論を概説することによって、筆者は、救済の仏教思想に関連して、宗教多元主義によるヒックの教義で理論的に説明することは困難であることを考察する。

(SUMMARY)

This study explores the problems in John Hick's (1922–2012) notion of “religious pluralism” from the perspective of Japanese Buddhism. However, religious pluralism is an idea originated from the Christian culture sphere. Therefore, it is important for us Japanese living in the Buddhist culture sphere to grasp of the structural content of religious pluralism itself. Consequently, first by representing the intellectual situation in which the idea of religious pluralism was presented to the theological world, and then by surveying arguments about the “Three Patterns” which define what Christianity as a religion considers itself to be, the author examines theoretical difficulties in Hick's doctrine of religious pluralism in connection with the Buddhist idea of salvation.

## 1. はじめに

本研究は、(1)宗教多元主義という現代「思潮」<sup>1</sup>が出現した経緯を述べ、(2)その構造を分析していくにあたって、伝統的キリスト教の自己理解が明瞭に反映されているだけでなく、諸宗教に対しても宗教多元主義の立場を解りやすくさせていることから「三つの類型」<sup>2</sup>の特徴を示し、(3)その代表的立場にあるジョン・ヒック（以後ヒックに統一）が提唱した理論において、仏教がどのように理解されているのかを、日本仏教の視点から考察するものである。『聖書』は「新共同訳」を使用する。

## 2. 宗教多元主義の出現

宗教多元主義はどのような史的背景から出現したのであろうか。その要因についてはさまざまな説があるが、本研究ではキリスト教的視点から論じられている二つの説を紹介する。そして「強力な福音派の、しかも<sup>ファンダメンタル</sup>根本主義的なキリスト教徒」<sup>3</sup>であったヒックが、自由主義神学を奉ずるリベラリストとなった経緯についても簡略に述べる。

### 2.1 間接要因—自由主義神学の台頭—

17・8世紀のヨーロッパにおける啓蒙主義運動を経て、19世紀ドイツを中心として自由主義神学（Liberal theology）と呼ばれる変革運動が起った。これは伝統的キリスト教神学に対抗して、理性的な認識を尊重した自由な発想、つまり『聖書』と教会とその伝統からキリスト教の教義を合理的に捉えようとする試みとして、当時主流であったヘーゲル哲学<sup>4</sup>がキリスト教神学と更には歴史学的研究方法と結びついでの変革運動であった。これの代表がヘーゲル左派で、汎神論的な観点から神話的部分の削除を提案して『聖書』批判を試みたダーフィット・シュトラウス（1808–1874）と、イエスの実在性を否定したブルーノ・バウアー（1809–1882）である。その後彼らは旧自由主義

<sup>1</sup> 岸根敏幸『宗教多元主義とは何か—宗教理解への探求—』晃洋書房、2001年、1頁。

<sup>2</sup> Alan Race, *Christians and Religious Pluralism: Patterns in the Christian Theology of Religions* (London: SCM Press Ltd, Second edition, 1993), pp. 10–105.

<sup>3</sup> ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名前をもつ』岩波書店、1986年、4頁。John Hick, *God Has Many Names: Britain's New Religious Pluralism* (London: Macmillan Press Ltd, 1980), p. 2. 以後、ジョン・ヒックの著作に関して、前掲書はヒック・和訳主タイトル・和訳頁・原著ページ、同上書は和訳頁と原著ページに略記。

<sup>4</sup> ヘーゲルの抱いた考えは汎神論と呼ばれ、神は善と悪を越えているという考えである。C.S. ルイス、鈴木秀夫訳『キリスト教の世界』大明堂、1994年、43頁。

と呼ばれるが、旧と新の違いは、新自由主義がキリスト教の絶対性を否定した点にある。その代表が、キリスト教の神秘性を排除して公然と三位一体論とキリスト論<sup>5</sup>を非合理的なものとして否定したアルブレヒト・リッチェル（1822–1889）である。

このように自由主義神学の台頭により、結果的に、キリスト教神学はキリスト教が諸宗教と異なる絶対的な存在であるという主張を放棄する、という発想をもつに至る。伝統的キリスト教の弁証家 C.S.ルイス（1898–1963）は、自由主義神学を「水割りのキリスト教 (Christianity-and-water)」と呼んでいる。なぜなら「天には善なる神がいます、万事めでたく何も言うことなし—こう言って、罪や地獄や悪魔や、それに救いといった問題にかかわる厄介な、恐ろしい教義はすべて素通りしてしまう考え方である」<sup>6</sup>からである。

以上から、人間が中心となって神を考えるという神学的在り方である自由主義神学の台頭は、直接的要因とは言えないが、宗教多元主義が出現するに至る遠因と言えよう。

## 2.2 直接要因—第二ヴァチカン公会議とエキュメニカル運動—

近代までのキリスト教にとり諸宗教は克服されるべき存在であった。ある地域に根付いた如何なる宗教も駆逐して、キリスト教がそれにとり代わることが宣教の目的であった。しかし第一次世界大戦以降からは、キリスト教にとって脅威になって来たのは諸宗教ではなく、神を否定するマルクス主義や無神論といった、宗教そのものの終わりを意味する世俗主義 (Secularism) への高まりであった。

「<sup>フルーオリズム</sup>多元主義と寛容は世俗化の落とし子」<sup>7</sup>であると言ったハーヴィー・コックス（1929–）が、世俗化 (Secularization) とは「宗教的支配や閉鎖的形而上学的世界観から自由にされるといふ、もうほとんど後に戻ることをできない、一つの歴史的過程である」<sup>8</sup>と宣言しているように、後戻りできないのであるならば、諸宗教と対立するのではなく協調しあって、宗教的世俗化問題に対処しようとする動きが伝統的キリスト

<sup>5</sup> キリスト論とはイエスが如何なる存在であるかに関する神学上の定義。伝統的キリスト教において、キリスト教を諸宗教との一線を画する「絶対的な存在と位置付ける根拠」が三位一体論とキリスト論である。前掲書、根岸敏幸、64頁参照。

<sup>6</sup> C.S.ルイス、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、1983年、77頁。C. S. Lewis, *Mere Christianity* (London: Collins, 2012), p. 40.

<sup>7</sup> ハーヴィー・コックス、塩月賢太郎訳『世俗都市』新教出版、1971年、16頁。

<sup>8</sup> 同上書、40頁。

教から出てきた。それが1962-65年の第二ヴァチカン公会議「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」<sup>9</sup>における新しい態度である。これが諸キリスト教会間の一致協力、所謂エキュメニカル運動の実質的な幕開けであり、伝統的キリスト教の新たな変革運動の展開である。わが国においては、これによる影響の成果が1987年に刊行された『聖書』の「新共同訳」である。

哲学や史学などと連動して大きく変化を遂げた自由主義神学者たちの変革運動と、カトリック教会と伝統的プロテスタント神学者たちの変革運動との相違は、キリスト教と諸宗教との協調、つまり「対話」を通して諸宗教への理解を深める積極的な姿勢にある<sup>10</sup>。

以上から、宗教多元主義出現の直接要因の一つと考えられるのは、キリスト教とは異なる諸宗教の存在と、それらの救済の道への可能性を真剣に考えなければならなかったキリスト教自身の変化にあったと言えよう。もう一つが、第二次世界大戦後、交通網や情報のシステムが急速に発展したことによって、キリスト教と諸宗教との接触体験、つまり非キリスト教文化圏における土着宗教への深い理解から、世界を一共同体（地球村）とみるグローバルな意識が、宗教多元主義出現への直接要因と考えられよう。

### 2.3 ヒックの略歴

1922年英国スカボローで生れたヒックは、両親と共に英国国教会に属す。父親が弁護士であったことから、彼もハル大学の法科に進学する。ところがヒックの著作『自伝』によると、一回生の時に霊的回心<sup>11</sup>を体験したことから長老派教会に籍を移す。大学も1941年にエジンバラ大学に移籍し<sup>12</sup>、1948年まで在籍して哲学士を取得する。その間1942-45年にわたり兵役拒否者として救急班に加わる。1948年オックスフォード大学大学院に入学、1950年に哲学博士号を取得する。その後ケンブリッジ・ウェストミンスター神学大学に在籍し、1953年牧師資格を取得、3年間ベルフォード教会にて牧会活動を務める。

<sup>9</sup> 南山大学監修『公会議公文書全集 VII』中央出版社、1967年、355頁。

<sup>10</sup> 古屋安雄『宗教の神学』ヨルダン社、1985年、188-191頁。

<sup>11</sup> ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『ジョン・ヒック自伝 ―宗教多元主義の実践と創造―』トランスビュー、2006年、51頁。

<sup>12</sup> 間瀬啓允「ジョン・ヒック年譜」、ヒック『神は多くの名前をもつ』、213頁。

1959年米国プリンストン神学校の哲学教授として招かれる。ところが、1962年に米合同長老教会の教職者としての信仰告白を余儀なくされ、その場で彼は『聖書』に記された六日間の天地創造やイエスの処女降誕などに関して「自分はこれを肯定できない」<sup>13</sup>と発言した。それがため教会の会議にかけられる。教会側が出した結論は、牧師と教会の管轄下にある神学校の教授資格との削除<sup>14</sup>であった。

この事件後ヒックは本国に戻り、1964年からケンブリッジ大学に務め、次にバーミンガム大学に移籍する。そこで彼が目にしたものは、英国第二の都市バーミンガムにおける宗教の多元化現象であった。当時のバーミンガム市内には、キリスト教徒やイスラム教徒（人口の二割を占めていた）のほかに、ヒンドゥー教徒、シーク教徒、ユダヤ教徒、仏教徒も居住していた。そのような市内でヒックは「人類の一致を目指す多くの信仰（All Faiths for One Race）」という活動体の議長を務め、諸宗教への理解を深めていく。その傍らで宗教多元主義の理論を構築し、彼は「キリスト中心主義（Chistocentrism）」からキリスト教以外の宗教の中にも神の啓示は現われていると「神中心主義（Theocentrism）」のリベラリストとなる<sup>15</sup>。

### 3. 三つの類型

ヒックをはじめとして宗教多元主義者が好んで使う類型が、英国のキリスト教神学者であり宗教多元主義者でもあるアラン・レイスが救済をどのように考えるかによって区分した、第一類型の宗教排他主義(Religious exclusivism)、第二類型の宗教包括主義(Religious inclusivism)、第三類型の宗教多元主義 (Religious pluralism)の「三つの類型」である。これ以外にも、たとえばリチャード・ニーバーが提示した「五つの類型」<sup>16</sup>があるが、これに関しては古屋安雄が「神学内の諸学科の研究の成果が必要であって、そのためにはもっと時間が必要と思われる」<sup>17</sup>と述べ、また小田垣雅也も「三つの類型」を提案しているが、これも小田垣自身が「未だ展開が不十分」<sup>18</sup>と述べている。よって

<sup>13</sup> 前掲書、ヒック『ジョン・ヒック自伝』、179頁。

<sup>14</sup> 同上書、179頁。

<sup>15</sup> 西谷幸介「宗教多元主義は日本人の無宗教的現状を肯定するイデオロギーではない」、間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008年、60頁。

<sup>16</sup> 第一類型「文化と対立するキリスト」、第二類型「文化のキリスト」、第三類型「文化上のキリスト」、第四類型「矛盾の中のキリストと文化」、第五類型「文化の変革者キリスト」。H・リチャード・ニーバー、赤城泰訳『キリストと文化』日本基督教団出版局、1967年、75-287頁。

<sup>17</sup> 前掲書、古屋安雄、318頁。

<sup>18</sup> 「i キリストないしキリスト教中心主義」、「ii 神中心主義」、「iii 救済論中心主義」。『ロマン

本研究は、キリスト教の自己理解が明瞭なことから、先行研究の多くが共通の了解事項のように認識していることからレイスの類型を用いて、ヒックの著作から三類型の特徴を示し、彼が宗教多元主義を三者間においてどのように位置づけたのか、考えてみたい。

### 3.1 宗教排他主義

宗教排他主義は、救済を「一つの特定の伝統に限定する」<sup>19</sup>。したがって「他（他宗教：筆者挿入）は救いの領域からはずす、あるいは明らかに排除する、ということが、一つの信仰箇条になる」<sup>20</sup>。これの典型が、カトリック教会の「教会の外に救いなし（Extra Ecclesiam nulla salus）」であり、伝統的プロテスタント教会の海外宣教における「キリスト教の外に救いなし」である<sup>21</sup>。したがって救済は、諸宗教の神・神々によって成し遂げられることはなく、唯一神の子イエス・キリストによってのみ(使徒4:12)可能となると考える<sup>22</sup>。

### 3.2 宗教包括主義

宗教排他主義と同じく宗教包括主義も、救済はキリスト論に基礎づけられている<sup>23</sup>。しかし宗教包括主義は「救いを人間的生の漸進的な変革として理解し、これをキリスト教の歴史のなかだけに限らず、他のすべての偉大な世界宗教の伝統のなかにも生じる出来事として見る」<sup>24</sup>。つまり、如何なる宗教でもそれなりに真理性を保有しているのでキリスト教の神に近づける可能性があるから、救済は信仰を放棄しない限り成し遂げられるという理解である。但しこの場合の救済は、聖霊が普遍的な効力を持っているがゆえに信仰に生きる人すべてに施される<sup>25</sup>という意味である。したがって、自宗教だけが救いの場であるとする宗教排他主義と、自宗教が救いのなかに他宗教に生き

---

チズムと現代神学』創文社、1992年、161-173頁。

<sup>19</sup> ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義—宗教理解のパラダイム変換—』法蔵館、1994年、65頁。John Hick, *Problems of Religious Pluralism*, (London: the Macmillan press Ltd, 1985), p.31.

<sup>20</sup> 同上書、65頁。原著、p.31.

<sup>21</sup> 同上書、65頁。原著、p.31.

<sup>22</sup> 同上書、70頁。原著、p.34.

<sup>23</sup> 同上書、68頁。原著、p.33.

<sup>24</sup> 同上書、68頁。原著、p.33.

<sup>25</sup> 同上書、67頁。原著、p.32.

る人びとを包括するという宗教包括主義とは「対照をなす」<sup>26</sup>。

### 3.3 宗教多元主義

多元主義という言葉は、価値(倫理・道徳)多元主義、文化多元主義、民族多元主義などと多方面で使われている。これは単に多数の価値、文化、民族が在るということではなく、善悪の価値観などは民族・文化によって異なるという多元的見方である。宗教においても一元的にみることをやめて、救済は多数あるということをもそのまま認めようではないかという主張が宗教多元主義である<sup>27</sup>。

宗教多元主義は、世界的にも宗教の世俗化、多元化現象が進む現代にあつて、自己の立場だけが真理であると主張する伝統的キリスト教の独善的な態度はすでに通用しないという認識に立つ。したがって一方ではグローバルな意識に示唆される方向で伝統的キリスト教の絶対主義を内部から解体し<sup>28</sup>、他方では伝統的キリスト教徒が「天の父」と呼ぶ「神」を「超越的な究極リアリティ (the ultimate transcendent Reality that we call God)」<sup>29</sup>としての「実在者 (the Real)」、あるいは「神の実在 (the divine reality、以後神の実在に統一)」<sup>30</sup>と呼び換えて、宗教とは「いずれもが神の実在に対するそれぞれの歴史や風土を踏まえた経験であり応答である」<sup>31</sup>と定義し、どの宗教にも真理性は存在していると説く。これの代表的立場にあるのがヒックであり、日本でのその立場の代表は八木誠一<sup>32</sup>であり、遠藤周作の小説『深い河』にも宗教多元主義が表現されている<sup>33</sup>。その特徴は以下の通りである。

#### (1) 宗教的統合論<sup>34</sup>

<sup>26</sup> ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教がつくる虹』岩波書店、1997年、280頁。John Hick, *The Rainbow of Faiths* (London: SCM Press Ltd, 1995), p. 148.

<sup>27</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、70頁。原著, p. 34.

<sup>28</sup> ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999年、195頁。John Hick, *The Metaphor of God Incarnate* (London: SCM Press Ltd, 1993), p. 152.

<sup>29</sup> 同上書、3頁。原著, p. ix.

<sup>30</sup> 同上書、173頁。原著, p. 134.

<sup>31</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、64頁。原著, p. 31.

<sup>32</sup> 「八木は第一類型からはっきりと第三類型へ転向した」、前掲書、古屋安雄、327頁。

<sup>33</sup> 遠藤周作『『深い河』創作日記』講談社、2000年、23-24頁。

<sup>34</sup> ヒックは「統合的な信仰をわれわれは持つべきだということ一、これが私の願いなのである」と述べている。前掲書、ヒック『宗教多元主義』、120頁。原著, p. 65.

宗教排他主義と宗教包括主義が救済においてキリスト教の優越性を主張するのに対して、宗教多元主義は救済への道は多数あることを主張する。なぜなら「諸信仰の宇宙では神が中心に来るのであって、キリスト教でもなければ、他のどの宗教でもない」<sup>35</sup>、「どの宗教も唯一無二ではなく、数あるうちの一つ」<sup>36</sup>に過ぎないからである。よって宗教多元主義は、宗教とは「一」なる「神的実在に対する人間のさまざまに異なる応答である」<sup>37</sup> から、どの宗教も「本質的に同一 (essentially the same)」<sup>38</sup>であると規定する。

## (2) 非神話化

宗教排他主義と宗教包括主義は、イエスはキリストであり、キリストは「神の子」と同意語であり、三位一体論の「子なる神」を表わすという堅い信念に立つ。これに対して宗教多元主義は、ナザレのイエス<sup>39</sup>はあくまでも「偉大な人間預言者」<sup>40</sup>、「中国の孔子、インドのゴータマやマハーヴィーラ、ペルシャのゾロアスターや、パレスチナのヘブライの預言者たち、そしてまた、ギリシアのピタゴラスやソクラテスやプラトンなど」と同じ「精神的教師」<sup>41</sup>であって「神であったとは受けとめない」<sup>42</sup>信念に立つ。よって宗教多元主義は、伝統的キリスト教が説く三位一体論やキリスト論は、イエスの死後、人間による「労作」<sup>43</sup>であるから、十字架に関する神話は「メタファー」として解釈する<sup>44</sup>。

---

<sup>35</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、110頁。原著, p.52.

<sup>36</sup> ジョン・ヒック、間瀬啓允 渡部信訳『もうひとつのキリスト教—多元的宗教理解—』日本基督教団出版局、1989年、164頁。 John Hick, *The Second Christianity* (London: SCM Press Ltd, 1994), p.91.

<sup>37</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、11頁。原著, p. 6.

<sup>38</sup> 同上書、97頁。原著, p. 63.

<sup>39</sup> ヒックは、三位一体論の子なる神の位置にあるイエスと「人類史に多大な影響を与えてきた」イエスとを区別して、後者をナザレのイエスと呼ぶ。前掲書、ヒック『宗教多元主義への道』、15頁。原著, p. 5.

<sup>40</sup> 同上書、195頁。原著, p. 152.

<sup>41</sup> 同上書、127頁。原著, pp. 95-96.

<sup>42</sup> 同上書、209頁。原著, p. 163.

<sup>43</sup> 同上書、38頁。原著, p. 25.

<sup>44</sup> 同上書、24頁。原著, p. 12.

(3) 汎神論的立場<sup>45</sup>

宗教多元主義は諸宗教を同格扱いする<sup>46</sup>。なぜなら諸宗教は「独自の色形をしたレンズ」<sup>47</sup>を通して、唯一なる神的実在を「人格的なアドナイとして、天の父として、アッラーとして、ヴィシュヌ、あるいはシバとして、あるいはまた、非人格的なブラフマンとして、タオ(道)として、ダルマカーヤ(法身)として、あるいは空」<sup>48</sup>として具体的に「覚知」<sup>49</sup>するよう神的実在によって導かれているからである。つまり人格的神であっても非人格的原理であっても実在は「一者」<sup>50</sup>であって、ただ各宗教はこれを「それぞれ異なる名前」<sup>51</sup>で呼んでいる、あるいは「神は色々な顔を持っておられる」<sup>52</sup>だけである。ここにおいて神を立てない仏教が包含される<sup>53</sup>。

## 3.4 宗教多元主義の位置

ヒックは、宗教排他主義を古代ギリシアの天文学者プトレマイオスが唱えた天動説に譬えて「古くて粗末なプトレマイオスの神学」<sup>54</sup>と呼び、宗教包括主義はこれと比べるならばまだ優っている、と考える。なぜなら、宗教包括主義は非キリスト教徒であっても信仰に生きる人すべてを「無名のキリスト教徒」<sup>55</sup>として神の恵みに与っている、と考えるからである。だがそれでも自宗教の優越性を前提としていることから、ヒックは宗教包括主義を「古いドグマの内容がまだ十分には骨抜きされていない」<sup>56</sup>と非難している。

ヒックは、時代遅れで「粗末な」宗教排他主義と、「古い排他主義的ドグマを拭い去っていない」<sup>57</sup>宗教包括主義との「両者に代わるのは、多元主義である」<sup>58</sup>と断言し

<sup>45</sup> ヒックは、森羅万象の「根源であり根拠」が神的実在であると述べている。同上書、210頁。原著, p. 163.

<sup>46</sup> 同上書、174頁。原著, p. 135.

<sup>47</sup> 同上書、182頁。原著, p. 141.

<sup>48</sup> 同上書、182頁。原著, p. 141.

<sup>49</sup> 同上書、182頁。原著, p. 141.

<sup>50</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、79頁。原著, p. 40.

<sup>51</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、161頁。原著, p. 74.

<sup>52</sup> 遠藤周作『深い河』講談社、2000年、196頁。

<sup>53</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、16頁。原著, p. 8.

<sup>54</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、99頁。原著, p. 53.

<sup>55</sup> カール・ラーナー、稲垣良典訳『人間の未来と神学』中央出版社、1975年、93-100頁。

<sup>56</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、69頁。原著, p. 33.

<sup>57</sup> 同上書、69頁。原著, p. 33.

ている。そして「これ（多元主義：筆者挿入）は包括主義の指し示すものよりも一層すすんだ結論を受け入れるものとみなしうる」<sup>59</sup>と評価している。つまり、地球を中心としてみたプトレマイオスの天動説から、今では誰もが認める太陽を中心としてみた地動説を唱えたコペルニクスの宇宙観の如く、三者間において段階的に進化したものが宗教多元主義であると位置づけている。だからヒックは、「一つの伝統だけにたよる絶対主義か、それともグローバルな宗教的状况についての純正な宗教多元主義的解釈かの、どちらか一方を、私たちは本当に選択しなければならない」<sup>60</sup>と、二者択一を迫ることができたのである。

#### 4. 宗教多元主義と仏教

宗教多元主義が「日本仏教における教学・宗学の課題として、仏教教団の公的な議論のなかで主題的に論じられた事例を、私は寡聞にして知らない」<sup>61</sup>と氣多雅子が述べているように、宗教多元主義はこれまで極少数の仏教学者が、個人的に、関心を示している程度であって、日本人の宗教意識からしても、仏や菩薩は人びとを救済するために神々という仮の姿をとって現われたと理解されている、所謂本地垂迹説といわれる神仏習合思想から、課題となりにくい傾向にある、と言えよう。

これに対して稲垣久和は、宗教多元主義は「日本の少数キリスト教徒が受け入れる理論ではなく、宗教的多数者が自己相対化のために発展させていく理論ではないか。〔中略〕仏教者が真剣に取り組むテーマではないか」<sup>62</sup>と問いかけている。つまり、日本における信仰者に自宗教を尋ねた場合、85.6パーセント<sup>63</sup>が仏教と答えた、その者たちに、宗教多元主義は何が仏教信心の真髓なのかを見極めさせるのではないかと問うているのである。だが稲垣は、自身がキリスト教徒であるがためか、日本の仏教徒が宗教多元主義をどのように考え取り組めばよいのか、具体的な方向性は語っていない。よって本研究は、ヒックが提唱した宗教多元主義が仏教をどのように理解してい

---

<sup>58</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義への道』、116頁。原著、p. 88.

<sup>59</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、69頁。原著、p. 34.

<sup>60</sup> 前掲書、ヒック『宗教がつくる虹』、77頁。原著、p. 3.

<sup>61</sup> 氣多雅子「宗教の多元的状况と仏教」、芦名定道編集『多元的世界における寛容と公共性—東アジアの視点から—』晃洋書房、2007年、3頁。

<sup>62</sup> 稲垣久和『公共の哲学の構築をめざして—キリスト教世界観・多元主義・複雑系—』教文館、2001年、97頁。

<sup>63</sup> 前掲書、濱田陽「インターレリジラス・エキスペリアンスの学」、間瀬啓允編、251頁。

るのか、考察してみたい。

#### 4.1 宗教多元主義における仏教理解

ヒックは「神はキリスト教の教会や礼拝堂のなかだけでなく、ユダヤ教の会堂、イスラム教寺院、シーク教寺院、ヒンドゥー教寺院のなかでも、異なりはしても重なる心像を介して礼拝されているという事実を知ることは、その神がまさしく人類全体の神 (he is the God of all mankind<sup>64</sup>) であって」<sup>65</sup>、すべての宗教は救済においては「同一」<sup>66</sup>であると断言している。また「キリスト教における神の像」が「阿弥陀信仰の仏教徒たちによっては真に礼拝されることがありえないと仮定する必要はない」<sup>67</sup>とも断言している。換言するならば、阿弥陀信仰の仏教徒がキリスト教の神を真に礼拝することが「ありえる」ということである。つまり仏教徒が「南無阿弥陀仏」と称えている対象は、実は、「私たち (キリスト教徒: 筆者挿入) が神と呼ぶ超越的な究極リアリティ」<sup>68</sup>である「一」なる神的存在であるから、ありえないと仮定する必要はない、という意味である。

そしてヒックは、読者に以下のことを「忘れてはならない」<sup>69</sup>と言う。

もしもキリスト教の福音が西方のローマ帝国ではなく、東方のインドに伝わっていたならば、イエスの宗教的重要性は、おそらくヒンドゥー教の文化の中であればイエスを「神の権化」と讃えることにより、また当時インドに発展しつつあった大乘仏教の中であればイエスを「菩薩」—究極的存在との合一に達したが、人類に向ける慈悲のゆえに此岸にとどまり、人々に生きる道を説く者—と讃えることによって表現されたであろう。<sup>70</sup>

このようにヒックの救済の論理構造においては、キリスト教の神と阿弥陀仏、ある

<sup>64</sup> ヒックは He ではなく小文字を使用。前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、viii 頁。原著、p.viii.

<sup>65</sup> 同上書、viii 頁。原著、p.viii.

<sup>66</sup> 同上書、97 頁。原著、p. 45.

<sup>67</sup> 同上書、122 頁。原著、p. 58.

<sup>68</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義への道』、3 頁。原著、p. ix.

<sup>69</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、151 頁。原著、pp. 70-71.

<sup>70</sup> 同上書、151 頁。原著、pp. 70-71.

いはイエスと菩薩とは「同一の霊的実在 (the same spiritual reality)」<sup>71</sup>と捉えるため「代替」が可能となる。だから彼は、将来、諸宗教は「自由に互いの礼拝を訪れ」、やがて「礼拝場所の共有に踏みきる」、「聖職者の交換説教」を行なうようになる<sup>72</sup>と言明できたのである。

では、如何にすれば上述のような見解に至ることができ得るのであろうか。ヒックは、インドの寓話「群盲、象を評す」<sup>73</sup>を引用してそれへの道を示している。彼は「われわれは象の足を木に、鼻を蛇に、尾を縄に解するような、おかしな<sup>ピクチャー</sup>像を思い描いてはいないだろうか」<sup>74</sup>と問うている。その真意は、キリスト教徒、仏教徒、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒も象の一側面を捉えて「これが象だ」と評しているに過ぎない、と言いたいのである。したがって象の立場である「人類全体の神」、すなわち神的実在と、視覚障害者の立場である「われわれ」との関係全体を見渡せる立場に立つならば、キリスト教徒も仏教徒も神的実在の一側面を捉えて、それを神・仏と呼んで拝している、その限りにおいて両者は正しいのであるから、キリスト教の神と阿弥陀仏は「代替的な救いの「場」、あるいは救いの「道」とみなすことができる」<sup>75</sup>と説いている。

以上のように、ヒックが提唱した宗教多元主義は、信仰者の心理を度外視した救済の論理を展開している。しかし宗教とは、親鸞が「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」<sup>76</sup>と、また使徒パウロがユダヤ教の立場<sup>77</sup>を認めた上で「十字架の言葉は、わたしたち救われる者には神の力です」(一コリン1:18)と語ったように、客観的知の立場以上に主体的・献身的信の立場を第一とする。救済される者にとって救済する者への帰依は、東西を問わず「一途」<sup>78</sup>である。信仰とは、生死の問題としてこの道しかない「一本の筋金」<sup>79</sup>

<sup>71</sup> 同上書、151頁。原著, p. 70.

<sup>72</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、121頁。原著, p. 58.

<sup>73</sup> ヒックはこの古い譬を用いた理由は語っていない。だが文脈から、すべての宗教は一に帰するという概念の万教帰一／同根を説明するために引用したと思われる。前掲書、ヒック『宗教多元主義』、74頁。

<sup>74</sup> 同上書、74頁。原著, pp. 36-37.

<sup>75</sup> 同上書、74頁。原著, pp. 36-37.

<sup>76</sup> 金子大栄校注『歎異抄』岩波書店、1931年、40頁。

<sup>77</sup> 「申命記」第21章には「木にかけられた者はすべて呪われる」と記されている。

<sup>78</sup> 北森嘉蔵「神はあるか」、『現代宗教講座第1巻 人はなぜ宗教を求めるのか』創文社、1954年、53頁。

<sup>79</sup> 奥村一郎『奥村一郎選集 第2巻 多文化に生きる宗教』オリエンズ宗教研究所、2009年、27頁。

のようなものである。高田信良が「親鸞の選択的・排他的な姿勢は法然にしたがっているのである」<sup>80</sup>と述べたように、自宗教を信じることは他宗教を信じないことを同時に選択しているのであるから、どうしても独善的・排他的な態度をとるようになる。

したがって、たとえヒックの救済の論理構造においてキリスト教の神と阿弥陀仏は代替が「可能」であろうとも、阿弥陀信仰の仏教徒においてはキリスト教の神は「摂取不捨」<sup>81</sup>ではないゆえに、代替は「不可」である。キリスト教と仏教は救済の目的、つまり他力による万民救済においては相似するが、救済の論理においては相違している。すなわち二者の思想構造を直視するならば、信仰の対象である「摂取不捨」の無量の大悲である阿弥陀仏と「仏教徒たちが根本的に拒絶する、人間的主体と神とのあいだの二元論を前提にしている」<sup>82</sup>善なる創造主であり、義（出 20：5-6）であり、十字架上でイエスを見捨てた（マタイ 27：46）キリスト教の神とは、同一視することはできない。各宗教は他のものに代替できない固有の救済の論理構造をもっているからである。よって、キリスト教文化圏から発生したヒックの宗教多元主義は、本質的に仏教とは異なる論理を用いている、ということにならざるを得ないのではないだろうか、と思われる。ヴォルフハルト・パネンベルクは、ヒックが考案した神的実在概念の曖昧さを以下のように指摘している。

ヒンドゥー教徒やシーク教徒が神に祈る時、彼らがキリスト教で礼拝される神と同じ神に祈ろうと思っているかどうかを、われわれはどのようにして知るのであるだろうか。このことは、敬虔なイスラム教徒の場合でも明快ではない。というのは、われわれも部分的には同じ「伝統の蓄積」を共有しているとは言え、イスラム教徒が神に向かう態度は、ムハマンドを信ずる彼の信仰に規定されているからである。それでもなおこれは同じ神なのであるだろうか。〔中略〕同じことは、他の道を歩む人々の宗教生活についても言い得るであろう。<sup>83</sup>

<sup>80</sup> 前掲書、高田信良「仏教研究から見た宗教多元主義」、間瀬啓允編、150頁。

<sup>81</sup> 「摂取（おさめとり）して、捨てることがない」、前掲書、金子大栄校注、41頁。

<sup>82</sup> ジョン・B・カブ・Jr、延原時行訳『対話を越えて』行路社、1985年、88頁。

<sup>83</sup> ヴォルフハルト・パネンベルク「多元主義と真理主張—宗教の神学の諸問題—」、G.デコスタ編、森本あんり訳『キリスト教は他宗教をどう考えるか—ポスト多元主義の宗教と神学』教文館、1997年、162頁。Wolfhart Pannenberg, Gavin D'Costa editor, *Religious Pluralism and Conflicting Truth Claims, The Problem of a Theology of the World Religions: Christian Uniqueness Reconsidered* (New York: Orbis Books, 1990), p. 103.

## 4.2 仏教の位置

ヒックは「偉大な世界宗教の信仰者たちは、事実上、この唯一の神（神的实在：筆者挿入）を礼拝している」<sup>84</sup>と宣言した。しかし、今日に至ってもキリスト教神学者たちの大半は「包括主義的立場にとどまっている」<sup>85</sup>のが実状である。そこで彼は、なぜ彼らが宗教多元主義へ踏み出せない、所謂「ルビコン渡河」<sup>86</sup>できないでいるのかを、宗教排他主義と宗教包括主義の教理に原因があることを指摘した。これによって、宗教包括主義が宗教多元主義へと「たとえばコペルニクス革命の場合のように、地球中心から太陽中心に世界像をきりかえるというような一つのパラダイム変換が起こる」<sup>87</sup>前形態であることが理解されるならば「われわれを包括主義から多元主義へと向かわせないではおかないだろう」<sup>88</sup>と提言した。つまり、今私たちに必要なのは、宗教理解におけるルビコン渡河のためのコペルニクスの転回であるというのである。なぜなら「われわれの究極的な救い・解放・悟り・完成」<sup>89</sup>は、「自我中心から实在中心への人間存在の変革」<sup>90</sup>、すなわち「一者(神的实在：筆者挿入)に対して全面的に自分を捧げること」<sup>91</sup>によって成就されるからである。

したがって、ヒックの主張に従うと「偉大な世界宗教」である仏教は、宗教多元主義的救済の論理を展開しなければならないこととなる。しかしながら仏教では「一切衆生悉有仏性」<sup>92</sup>、仏は仏性に基つき「あらゆる人間」<sup>93</sup>に慈悲を注ぐと説く。人間や動物ばかりでなく草木国土の類<sup>94</sup>においても、生命あるものすべてに慈悲を注ぐと説く。よって、仏教を三つの類型の内のどれかに当て嵌めるとしたならば、救済においては、

<sup>84</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、103頁。原著、p. 48.

<sup>85</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、70頁。原著、p. 34.

<sup>86</sup> 前掲書、ヒック『キリスト教の絶対性を越えて』、42頁。原著、p. 16.

<sup>87</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義』、99頁。原著、p. 53.

<sup>88</sup> 同上書、77頁。原著、p. 39.

<sup>89</sup> 同上書、78頁。原著、p. 39.

<sup>90</sup> 同上書、62頁。原著、p. 29.

<sup>91</sup> 同上書、78頁。原著、p. 39.

<sup>92</sup> 古田和弘『涅槃経—「わたし」とは何か—』真宗大谷派宗務所出版部、2008年、49頁。

<sup>93</sup> ミルチア・エリアーデ、柴田史子訳『世界宗教史4』筑摩書房、2009年、031頁。

<sup>94</sup> 草木国土の仏性の有無に関して石上善應は「有仏性と見る立場が有力である」と述べている。石上善應「仏教の根本理念の普遍性と現代」、平成7年度科学研究補助金研究成果報告書 石上善應編『仏教の現代的意義に関する基礎的研究』大正大学、1996年、8頁。

石上善應が「仏教は人間と自然との共生を説くことに至る」<sup>95</sup>と述べているように、仏教は万民救済論的な意味における宗教包括主義的立場<sup>96</sup>に留まる、と考えられよう。

だが先述の 3.4 においてヒックが位置づけた宗教理解の序列からすると、もし仏教が宗教包括主義的立場に留まるならば、時代錯誤な宗教排他主義よりはまだ優っているが、宗教多元主義と比べると「古い教理の諸前提を踏み越えてはいない」<sup>97</sup>、劣った位置にあると見做される、こととなろう。しかし仏教から宗教包括主義的救済の論理を排除すると、仏の慈悲は限定されたものとなる。すなわち、仏は仏教徒しか救済しない救済者となる。ゆえに、たとえ宗教多元主義者から仏教は「古くて粗末」なものと位置づけられようとも、仏教は民族と言語を超えた十方の衆生を仏の子としてみる救済の論理構造から、どうしても宗教包括主義的立場に留まらざるを得ないのではないだろうか、と考える。

以上のように、人間の内面性における「苦」、すなわち煩惱を無くすことによってそれを克服し、すべての人が平安な日々を送ることができ得る「道」を釈迦によって生み出された仏教は、確かに、国境や民族、言語、文化の壁を越えた世界宗教ではあるが、かといってヒックが提唱した宗教多元主義を「無条件」で受容するものではないのである。

## 5. おわりに

ヒックは、まず宗教の在り方は宗教排他主義・宗教包括主義・宗教多元主義の三類型に分かれるという立場に立って、宗教多元主義が三者間で最も優れた宗教理解であることを主張した。つぎに根源から宗教を捉えるならば、すべての宗教は「一」なる神的存在を拝しているのであるから救済は「本質的に同一」であると断定して、宗教の平等を説いた。これゆえに宗教上の偏見と差別を払拭させ「寛容に至らせる」<sup>98</sup>、「宗教間の誤解と闘争に終止符が打たれる」<sup>99</sup>、世界平和実現のためには必要な論理であると、ユニテリアン<sup>100</sup>をはじめとして、わが国のような習合宗教の徒には馴染みやすい

<sup>95</sup> 同上書、石上善應、8 頁。

<sup>96</sup> 岸根敏幸は、レイスの三つの類型は「キリスト教の立場に限定する必然性は何もない」と述べている。前掲書、12 頁。

<sup>97</sup> 前掲書、ヒック『神は多くの名前をもつ』、107 頁。原著、p. 51.

<sup>98</sup> 前掲書、ヒック『宗教多元主義への道』、189 頁。原著、p. 147.

<sup>99</sup> 前掲書、ヒック『もうひとつのキリスト教』、163 頁。原著、p. 91.

<sup>100</sup> ユニテリアンとは「三位一体の教義を否定し、イエス・キリストが求めたものを自らの生活

側面から、たとえば信楽峻麿が「私は基本的には、浄土宗、浄土真宗においても、この宗教多元主義の主張に対しては、賛意を表すべきであると思う」<sup>101</sup>と発言しているように、賛同する人は少なくはない。

しかし、すべての宗教が神的存在を拝しているのであるならば、仏教徒であることの必然性は「どこ」で見出されるのであろうか。また救済を「自我中心から神的存在中心へ人間存在の変革」と捉えるということは、救済を現世的・人間的に捉えることに繋がり、大乘仏教が説く浄土思想とは根本的に対立するのではないだろうか。そして「インドのゴータマ」は、古代ギリシアの数学者ピタゴラスや哲学者ソクラテス、プラトンと等価の位置におかれた「精神的教師」の一人に過ぎないのであろうか、といった疑問は残る。それは、ヒックが仏教を仏教自身の自己理解に適正な方法で理解しようとしたのではなく、彼の実在中心主義（Realocentrism）<sup>102</sup>に神を立てない仏教を組入れて理解しようとしたからである。だからウェスレー・アリアラジャは「神中心的理解とはしたがって、他の人々に押しつける新しい枠組ではない」<sup>103</sup>と明言している。

したがって検討される課題は、現実における宗教の世俗化、多元化現象を認めた上で、諸宗教が救済において自身が果たすべき社会的役割と価値とを、他者との比較ではなく自身が定義する、すなわち諸宗教を「同一」視するのではなく、各々が「唯一」であることが重視されなければならないのである。よって本研究は、仏教が宗教である以上自己の奉ずる教学を最高と見る宗教排他主義的立場<sup>104</sup>をとらざるを得ないが、しかし仏教は、仏性にに基づき「誰もが仏になりうる、と説く」<sup>105</sup>ことから、救済においては特定の民族に限定しない世界宗教として宗教包括主義的立場に留まらざるを得ないのではないかと考える。

---

において実践しようとする」者たち。斎藤謙次「平和を求める宗教間対話の実践と課題」、星川恵慈ほか5名『現代世界と宗教の課題』蒼天出版、2005年、82頁。

<sup>101</sup> 信楽峻麿「宗教多元主義と浄土教」（『比較思想研究』第22号、比較思想学会、1995年）、16頁。

<sup>102</sup> 前掲書、ギャヴィン・ドウコスタ「ヒックと宗教多元主義—さらなる転回へ—」、間瀬啓允 稲垣久和編、16頁。

<sup>103</sup> ウェスレー・アリアラジャ、中嶋正昭訳『聖書と他宗教の人びと』日本基督教団出版局、1987年、138頁。

<sup>104</sup> 梅津光弘は宗教排他主義を「専心的な宗教的信念の積極的側面」として捉えることを提案している。前掲書、間瀬啓允 稲垣久和編、111頁。

<sup>105</sup> 竹村牧男「諸宗教の共存への道を求めて」（宗教間対話研究所、2018年）、3頁。

以上から、今後の諸宗教は、自身の宗教信念を全うしながら、他宗教の真理性と意義、つまり固有の歴史や文化、聖典、儀礼、信条などを尊重し合えるような、学的探究の地平を追及していくことが重要となろう。

キーワード：

救済、三つの類型、神的実在、キリスト教の神、仏

Keywords：

Salvation, Three Patterns, the Divine Reality, God, Buddha

